〔中国絵画史余話〕

隠し落款について

当館の所蔵する国宝の一つ、李迪筆「雪中帰牧図」双幅には、各々の画面の一隅に「李迪」と画家名が小さく墨書されています。この作者の署名を落款（らっかん）といい、この作品のように絵の中に目立たぬように書き入れたものを隠し落款と呼んでいます。

辞書によれば、落款は「落成款識(かんし)」の略で、古く、青銅器の銘文のうち陽文（文字が凸になっているもの）を款、陰文（文字が凹になっているもの）を識と呼んだことに由来するそうです。

さて、李迪の雪中帰牧図はこの秋の名品展にも出陳されますが、展示場でガラスケース越しに見ていては、落款のあることにほとんどの方は気がつかないのではないでしょうか。一年ほど前の、美のたより79号にも書きましたが、牛に騎乗する右幅は右下の土坡の暗部に、左幅は二本の木の間の土坡に、どちらも縦に李迪と墨書されています。二文字で1cmほどしかなく、もともと目立たないように、場所を選んで配しているのですから、一見してわからないのが当然と言えましょう。

この隠し落款は、主として宋時代の絵画に見られ、元時代以後の画にはあまり見出すことはできません。その大きな理由は宋代絵画の特質と画家のあり方に求めることができます。

すなわち、六朝、唐と発展を続けてきた中国絵画は宋代にいたり、淡墨を自在に駆使し、精妙な大気表現を行なうことができるようになり、奥深い絵画空間を画絹上に作り上げ、きわめて写実的で[illegible]的な画を完成しました。その[illegible]は完結性が高く、絵そのもの[illegible]賞することを要求しています。

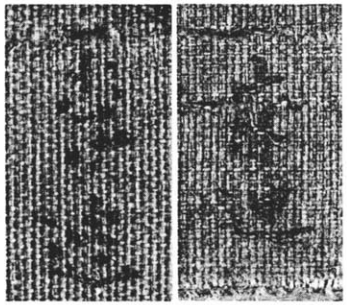
一方、この時代には宮廷の作画機構である画院が充実したこともあって、画家の画名に対する意識も高まり、制作者の名を記すことが一般的になります。このような事情のため、鑑賞の妨げにならないように小さな字で署名され、しばしば隠し落款が用いられたと考えられるのです。

こうした機知を働かせた款署の方法は中国に限ったことではなく、例えば、西洋の銅版画にも、モノグラム（画家の頭文字の組合せ）が画面の目立たぬ位置に書き込まれている作品を見出せます。

隠し落款が記される場所としては、本図のような土坡のほか[illegible]や木の幹といったモチーフの[illegible]に書き込む場合や、枝先や樹葉の脇といった、全体を見ているときには目障りにならない位置が選ばれています。このように画と一体となっている隠し落款は、後世に画の本来の作者とは無関係に書き入れられた偽款の可能性が低く、画家の様式を研究する上で重要視されます。

隠し落款を捜し当てるために、作品を隈なく見ることは、推理小説の謎解きのようなおもしろさがあり、そして、それは画そのものの新たな魅力を発見することにつながるのです。　（藤田伸也）

李迪筆 雪中帰牧図双幅（落款）
左幅　右幅



季刊 美のたより No.84
昭和 63 年 8 月 25 日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.